

1 社会教育の内容

5.1 社会教育の特質から見た社会教育の内容

社会教育は教育活動の一つであり、重要な教育領域のひとつである。教育の働きかけには、個人を充実しようという個性伸長・個性化の側面と、社会の中で共に生きていく上で必要な社会性の獲得という社会化の側面の、二つがある。社会教育も同様である。

また、教育には、現状を維持しようとする方向性と、現状を改善・発展させようとする方向性をもったものがある。社会教育の場合も、また同じである。

さらに、学校教育との比較では、学校教育では教科やカリキュラムに基づいた体系的な内容を学び、将来に向けての準備学習を特徴とするが、社会教育では、日常生活上のさまざまな知識や課題解決のための学習が中心である。そして、社会教育の内容については、特に定められたものがあるわけではなく、一人一人の自覚と必要性によって学ばれるところに特徴がある。「教育内容」というよりも、「学習内容」といわれるゆえんである。そして、社会教育はまた、学校教育にはとらわれない幅広い内容をもっている。学習機会提供者によって提供される内容はさまざまであるといってよい。学校教育を補充・補完し、発展・拡張する内容をもっているといえる。

さらにまた、学習方法や形態の特質の面からも、内容に関わる特徴が見られる。すなわち、社会教育活動それ自体は、個人学習から、集団学習や集会学習という集合学習の形態まで、さまざまな取り組みと活動の幅をもっている。態度変容の学習内容の場合、一人では学べない集合学習が欠かせないともいえる。

加えて、現在のような変化が激しい社会にあっては、その時々が必要とされる課題への対応が重要であり、それらの課題に適切に対応するためには、絶えず「学習」することが必要である。生涯学習社会へと変化する中で、従来から社会教育の内容とされてきたものが大きく変わろうとしている。

5.2 教育・学習内容の具体例

では、社会教育の内容としてどのような取り組みが具体的にあげられるであろうか。

(1) 個人的欲求か社会的要請か

はっきり自覚し顕在化した個人的欲求に基づく内容としては、趣味活動に関わる内容があるであろう。音楽や絵画が好きだ、囲碁の腕を上げたいなど、個人的な要求・欲求から学びたいとする内容である。また、職業上の知識・技術の向上や資格取得なども含まれる。一方、「裁判員制度の導入」に伴って国民としてすべきことは何かを知っておかなければならない、環境保護のために心がけなければならないことは何かなど、市民としての責任を果たすために、社会的に必要とされる内容がある。

(2) 社会や文化の維持か改善・発展か

地域の伝統文化を伝えたい・受け継ぎたい、漬物の漬け方を学びたいなどは、これまで受け継がれてきた社会や文化を次の時代に伝えていく内容といえる。その一方で、交通事故が多いので安全教育が必要である、男女共同参画社会の実現に貢献したいなどは、現状を改善し・社会を発展させる方向の内容といえるであろう

(3) 学校教育との関わりで

学校の教育課程として行われる体育やスポーツの学習は、競技種目一つをとっても限りがある。また、音楽科のなかで学ぶ楽器の演奏についても、数ある楽器の種類の中では、非常に少ない種類しか体験できない。しかしながら、社会教育はそれらを補充・補完し、発展・拡張することができる。学校では行われないスポーツを楽しんだり、珍しい楽器を弾くこともできる。

また、教室の中での教育・学習が中心の学校教育に対して、体験を大切にし、実際に見て・触れて・感じて学ぶこともできる社会教育は、生き生きとした内容をもっている。そして、学校教育終了後、社会の変化の応じて必要になった事柄（例えば、パソコン、インターネットの技術など）を、社会教育の場で学ぶことができるということは、まさに、学校教育を補完、拡張する内容といえるであろう。

(4) ともに学ぶ中で

私たちが教育を受け、学習をする際に、一人ではなかなか取り組めない問題も多い。たとえば、地域や職場の人間関係を学ぶこと、仕事の進め方を学ぶことなどは、学校時代で完了することはない。社会に出てから継続的に学ぶ内容といえる。人間関係をうまくつづれない場合、ともすれば「対人恐怖」などの「病的なこと」としてとらえられてしまう可能性もある。しかし、同じような立場の人々とともに学ぶ中で、集団としての学習内容とは別に、各人の態度変容も行われ、結果として人間関係調整能力の習得になっている場合がある。

また、職場におけるメタボ対策など、一人ではなかなか取り組むことができないことも、同僚とともに参加し、学び、挑戦する中で、問題の解決を図ることができる場合もある。日本社会が国際化する中で外国語習得が必要とされるのは、個人だけの問題ではなく地域の課題でもある。少子高齢化が進む中で、問題への対応は個々の家庭だけではなく、地域全体が解決しなければならない問題でもある。そうした生活課題の解決や地域課題の解決は、一人では取り組めない問題であり、ともに学習することによって解決へとつながる。

5.3 教育・学習内容の分類とその視点

われわれが教育を受けるとき、あるいは、学習をするとき、そこで学ばれるものは、一つには「知識」であり、二つに「技術」であり、三つには「態度」である。これらは明確に分けられる場合もあるが、渾然一体として分けられない場合もある。

また、社会教育の学習内容の検討をする際、社会教育の対象とされる子ども（乳幼児を対象とする場合は、直接的には親になるが）から高齢者まで、幅の広い年齢層を視野に入れなければならない。また、個人によって必要度や関心度などがさまざまに異なる学習内容は、背景となる地域や文化の違いによっても、時代状況によっても異なり、広範囲かつ多種多様と言わざるを得ない。

そこで、学習内容について整理するために何かしらの視点を設けることによって、社会教育の実態をとらえることができるとともに、学習機会提供の際のプログラム編成をはじめ、生涯学習推進支援、社会教育関連施策の決定や社会教育計画作成等に生かすことができる。

従来から、「学習内容」を「課題」から分類し、とらえようとするものが多い。それは、(1)発達課題、(2)現代的課題、(3)生活課題（地域課題）といわれるものである。

(1) 発達課題

人は誕生してから死に至るまでの間に、成長・発達・変化をしていく。この間に個人が直面する課題を適切に解決することによって、次の成長・発達につなげることができる。その乗り越えるべき課題を発達課題という。

多くの人に共通する特徴を、「ライフサイクル」という言葉で表し、また、ライフサイクルを分ける人生各期の区分が「ライフステージ」とよばれ、一般的には、乳児期・幼児期・学童期・青年期・成人期・壮年期・高齢期とに分けられる。それぞれのライフステージには固有の発達課題があるとする。

このような理論を唱える人には、R・J・ハヴィガーストやE・H・エリクソンなどがいる。しかし、課題の導出過程が必ずしも理論的・普遍的とはいえず、文化や社会に依存するものとなっていて、日本社会にそのままあてはめるわけにはいかない。

(2) 現代的課題

現代的課題の用語を最初に用いたのは、最初に発足した生涯学習審議会であり、その答申「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」（平成4年）の中で提言された。

今日の我が国の社会が急激に変化しつつある中で、人間の生き方、価値観、行動様式が変化を迫られ、時代の要請するものとそぐわなくなってきたことを指摘した。現代的課題とは、地球環境の保全、国際理解等の世界的な課題から、人々が社会生活を営む上で、理解し、体得しておくことが望まれる課題であり、「社会の急激な変化に対応し、人間性豊かな生活を営む必要のある課題」と定義される。しかし、時代の進展とともに、次々と新たな問題に直面することになる。

(3) 生活課題と地域課題

私たちが日々の生活をおくる中で、職業生活、家庭生活、人間形成、余暇の利用、健康の維持管理、地域社会生活など、さまざまな領域において、解決すべき問題を生活課題と称している。

これらの中で、多くの住民が共通して直面していながら、個人ではその解決が不可能であったり、地域住民の共同での取り組みによってはじめて解決が可能となる問題を、地域課題という。これには、特定地域に限定される問題と、生活が均質化し、地

第5章 社会教育の内容と方法・形態

域的特色が薄れたな中では、全国に共通する地域の問題も見られる。社会教育に関する地域的な取り組みがテレビ番組等で紹介され、「地域課題解決のモデル」として示されるような状況も現れている。

地域的な共通性や特色をとらえることが難しくなっている時代ではあるが、住民生活のと社会教育分野における行政的支援とが乖離することはなく、社会教育の内容をとらえる視点としての重要性は高い。

5.4 学習要求とその実態

日本人は具体的にどのような内容を学んでいるかについて、調査結果に表れている実態を見ることにする。平成20年5月に内閣府が実施した「生涯学習に関する世論調査」で明らかになった、「生涯学習実施状況」と、「してみたい学習の内容」について示したものである。ここでは生涯学習についての調査であるが、社会教育の取り組みとして考えても間違いはない。

表5-4-1 生涯学習の実施状況と、「してみたい学習」の内容

生涯学習の実施状況	該当者数	したことがある(小計)	健康・スポーツ	趣味的なもの	教養的なもの	パソコン等	家庭生活に必要なもの	職業上必要なこと	ボランティア活動等	体験的活動	育児・教育	学校での学習	その他	(この1年くらい)していない	わからない	計(M. T)
総数	1837	47.2	22.5	19.8	10.2	14	8.4	9.3	6.9	4	4.7	1.6	0.6	51.4	1.4	154.8
してみたい学習の内容	該当者数	健康・スポーツ	趣味的なもの	教養的なもの	パソコン等	家庭生活に必要なもの	職業上必要なこと	ボランティア活動等	体験的活動	育児・教育	学校での学習	その他		わからない	計(M. T)	
総数	1295	55.1	53.2	29.2	25.8	23.6	17.6	17.6	15.3	8.3	4	0.5		0.7	250.9	

ア) 健康・スポーツ（健康法、医学、栄養、ジョギング、水泳など）

イ) 趣味的なもの（音楽、美術、筆道、舞踊、書道など）

ウ) 教養的なもの（文学、歴史、科学、語学、社会問題など）

エ) パソコン・インターネットに関すること

オ) 家庭生活に役立つ技能（料理、洋服、和裁、編み物など）

カ) 職業上必要な知識・技能（仕事に関係のある知識の習得や資格の取得など）

キ) ボランティア活動やそのために必要な知識・技能

ク) 自然体験や生活体験などの体験活動

ケ) 育児・教育（幼児教育・教育問題など）

コ) 学校（高等・専修・各種学校、大学、大学院など）の正規課程での学習

サ) その他

シ) わからない

（調査は「したことがある」という回答者に対してはその内容を複数回答で尋ねており、合計が100%＝1837人を超えている。）

表からわかるとおり、生涯学習活動を「したことがある」という人は47.2%であり、半数以下となっている。やや数値が下がっているように思われるが、「生涯学習活動」という言葉や定義の問題と回答者の考えのズレのようなことも予想される。また、どのような内容を学んでいるかといえば、最も多いのは「健康・スポーツ」であり、2

番目が「趣味的なもの」である。

「してみたい学習」では、同じく「健康・スポーツ」「趣味的なもの」と続く。また、「してみたい内容」から「している内容」を引いた比率（「したいけれどもできていない」という人の割合）も、ほぼ同じ内容があげられている。

5.5 生涯学習社会の中での社会教育とその内容

新しい教育基本法の制定に始まり、社会教育関係の法律改正も進められた。社会教育法の中には、「生涯学習の振興に寄与する」という条文が明確になり、社会教育による支援の重要性が高まっている。

したがって、生涯学習社会の形成に果たす社会教育の役割は今後も大きいといえる。①人間の生涯発達上の課題への対応として、生活課題への対応として、教育・学習は常に求められる。②現代的課題は形を変えつつも常に乗り越えなければならない課題として現れてくる。こうした課題は学習を通してしか解決できない。③学習要求を学習行動へとつなげ、学習成果を評価し、活用にまで結びつけることが、これからますます重要になってくる。④日本では、次の時代に向けた教育立国として、「知の循環型社会」を目指した取り組みが始まっている。以上、こうしたことへの貢献が社会教育にも求められているのであり、内容を検討する際の視点としていかなければならない。

（山本 和人）